



市民がつくるまちづくり情報誌 コミュニティくさつ

2011年
早春号

通算
90号

今号は寺院をテーマに取り上げていますが、寺院がもつ宗教的要素ではなく、地域のつながりの側面において寺院が果たしてきた機能など、「コミュニティと寺院」の関係性に主眼をおいた内容になっています。特定の宗教・宗派を支持するものではありません。

矢橋・良覚寺の大屋根(写真:大條)

お寺さんへ行こう

今号のイラスト

絵:大村恵



もくじ

- ②③ 行けば、何とかなる…そんなお寺へ
西方寺 牧達玄さん
- ④⑤ 今の社会だからこそ、意識して「開けとく」
良覚寺 谷大輔さん
- ⑥⑦ ゆっくり草津街道物語⑬
異国の王子がたどり着いた地「集から穴村へ」
- ⑧⑨ お寺という「場」を共に創っていく
「開かれたお寺」であり続ける…
應典院 山口洋典さん
- ⑩ 俳句散歩「冬」
- ⑪ ええやんご近所ライフ② 元気なまち
一人のやる気で地域が変わる
- ⑫ 熊谷栄三郎の徒然草津③ 「犬が好き」

お知らせ

(財)草津市コミュニティ事業団は4月より「公益財団法人」として新たなスタートをします。さらに皆さんの身近な存在として、また草津のまちづくりの応援団として、職員一同頑張っています。



行けば、なんとかなる… そんなお寺へ



西方寺（青地）住職 牧 達玄 さん

青地にある西方寺は浄土宗のお寺。この寺では100年も前から地蔵盆が開かれていましたが、「もっと子どもたちに楽しいことができれば…」と昨年「地蔵祭」と名前を改め、流しそうめんにつかみ、絵本の読み聞かせから「親子で楽しむ箏コンサート」まで規模も内容も大きく変えて開催しました。

それでもここはお寺。このコンサートでは、西方寺に残るお地蔵さまにまつわる物語から創作された歌が披露されました。

檀家でない人たちが集まる

戦国時代、信長の焼き討ちで灰になったお地蔵さまを地域の人が発見。もう一体の地蔵の体内にいて挿んだという「西方寺子育て地蔵ものがたり」というお話から生まれた創作曲「炭になったお地蔵さま」は西方寺の檀家の出である音楽家の方に作曲してもらい、ここでの披露が叶いました。当日はなんと150名もの親子が参加。志津地区ではそれぞれ町内会でも8月に地蔵盆がありますが、7月に行われるこの「地蔵祭」は、それは別の寺独自の行事です。さらに驚くのは最近で来た近隣の新しい住宅地の親子がたくさん来てくれたこと。この方たちは5月の「花まつり」にも来ていただいています。

檀家でもない新しい住民の参加、これにはいくつかの要因が重なっています。一つはここが普段から地域とお寺さんのつながりが強い地域だということ。だから一寺の一つの催しでも各町内会の回覧版で各戸に知らせる協力が得られました。また新しい住宅地の近くにはお寺がなく、そのような行事もなかったこと。そして何より、お寺さんが「檀家だけでなく地域の子どもたちのために」とお寺を開こうとしたことです。

地域への開き方

実は西方寺、先代から「地域に開かれた寺」として色々なことをやってきました。戦争も末期の何もないうころ、大阪から子どもたちが疎開してきました。親や友だちと離れた疎開生活、心細いなかで地域の子ど

もたちと一緒に遊んでもらう場として寺を開放したことが、現在の子どもが集まる活動へとつながっています。寺の裏山にある里山も寺の部屋だつて空いている時は自由に使ってもらっています。

また浄土宗には「かねう鉦講」という行事があります。鉦を鳴らして念仏を唱える行事で昔は青年会が継承していましたが、青年会も減り、今でも続けているところは少なくなりました。西方寺ではこの鉦講の対象を小学生にした「子ども鉦講」として始めました。地域の子どもであれば宗派が違っても参加できるのは、この寺だけです。

教育は学校だけでない

西方寺ではボーイスカウトやガールスカウトなどのスカウト活動も行っています。イギリスを発祥とするスカウトはキリスト教の活動だと思ってる人もあるようですが、スカウトの基本理念は神（仏）に真の心を捧げ信仰心をつくり、国に忠誠を誓う心



西方寺の本堂。境内の梅がとても綺麗でした。

を育むこと。日本で神や仏と言えば、神社や寺といふことになり。だから西方寺のように寺や神社があまり宗教色を出さずにスカウト活動の拠点や活動支援をしてきました。西方寺がスカウトに関わるようになって早60年。今までキャンプ、たけのこ掘り、野草取りなど多彩な活動をしてきました。今ではスカウトで育った子どもも大きくなり、寺の行事に参加してくれる子もいます。

よく言われることですが、子どもたちにとって小さな時に行う情操教育は大切。スカウトなども捉（ルール）や誓いといった心の情操も大事にしています。寺子屋活動から始まり、このように教育の場としてお寺が地域に果たす役割は大きいと思っています。



(上・左) 西方寺の裏山。スカウト活動などの場となっています。

お寺に行けばなんとかなる

「こうやって地域の中でのお寺の役割、地域に身近なお寺を考えると、「誰でもどうぞ」という開き方が見えてきそうです。地域の中で、あるいは生活の中で何かあった時、「お寺に行けば何とかなるのでは」と地域のみなさんが思ってくれる存在になりたいし、そのためには宗派を超えた対応を積み重ねていくしかない。お陰さまで檀家の方々も非常に理解があって、「法要や宗派以外のこともどんどんやってほしい」と言われていて、本当にありがたいと思っています。

志津地区では、宗派の異なる7ヶ寺で揃って托鉢を行い、その浄財を仏教女性会などに助成しています。今後もお寺のネットワークで社会貢献を行っていききたい。

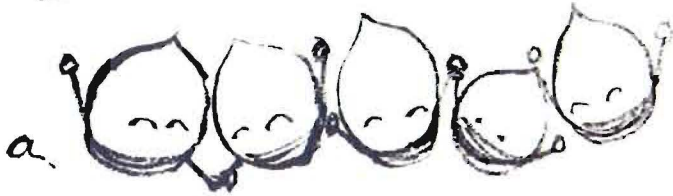


桜の中、西方寺の前を散歩する園児たち。
(写真は以前のもの)

西方寺は、これからも21世紀の心のオアシスとして、命の尊さを考え、心のふれあいを大切に、青少年の健全な成長を願い、地域に開かれ、愛され、親しまれるお寺として日々精進努力していきたいと思っています。

(聞き手・仲野優子)

集人 所開心



(絵と字) 中村明雄

○ 西方寺

青地にある浄土宗のお寺
草津市青地町1146
電話 564-2277 / FAX 564-5966

今の社会だからこそ、意識して「開けとく」^あ

良覚寺（矢橋） 住職 谷 大輔 さん



元々サラリーマンで結婚して住職になりました。若いころは、お寺に良い印象を持っていなかったですね。中身が見えず、何をしているのか分からない。お寺に行く機会だってない。私は昭和42年生まれですが、同世代の人たちが寺に抱く感情だと思います。

だから「寺に転職する」くらいの軽い感覚だったんですよ。

寺は公共施設

良覚寺は500年前に「矢橋西道場」として誕生したとされています。「ここもそうですが浄土真宗の寺の多くは、念仏道場と言って、「この教えなら自分も生きていける」と思った地域の人たちが「念仏を聞いて自分の人生を確かめる場所」として、自主的に土地や材料、労働などを提供しながら作った施設として始まったものが多い。今で言う公共施設に似てますかね。だから寺は「門徒のもの」という考え方が根底にあります。

知っていることって、「く一部

元々サラリーマンで結婚して住職になりました。住職になるための学校で「仏教とは君の考えているような狭いものではない。葬式や法事を通して知っている寺と言つのは仏教という大きな世界の「く一部だし、君の出会っているお坊さんも「く一部。たくさんのお坊さんに出会ってきな

い。」と繰り返し言われて、自分が仏教に持つていた先入観が少しずつ壊れていきました。こうしてたくさんのお坊さんに出会えたことが良かったなと思います。

お寺でする世間話

50年くらい前。若いお坊さんたちが集まる仏教青年会が「お寺さんにできることは何か」と考え、最初実践されたのが日曜学校。良覚寺でも先代の時には日曜学校に端を発し、近くに公立の保育園ができるまでは保育園をしていました。農繁期はどの農家も子どもを見てあげられない。それで子どもを寺に集め、読み書きを教えたのが日曜学校です。地域の暮らしやリズムに理にかなっていた。お寺さん系の保育園があるのはその流れです。

また良覚寺では毎月「^{せとく}覺の会」という学習会をしています。学習会といっても地域の人に寄ってもらい、お勤めをし、講話を聞いていただいたあと世間話をするだけ。でも「お寺」とい

う場でする世間話というのは、普通の世間話とは少し違う気がするんですね。集まる人たちは同じ地域に住んでいるけど、年代も性別も重ねた経験も違う。そんな人たちが寺が触媒になって集まり、仏さんの前で自分が経験したことや、感じることを喋ったり、今、世の中で起きていることを話し合ったりする。世間話といえ、こうして様々な背景を持った人たちが寺を核にして時間と空間を共有することで何かが生まれてくるのではないかなと思っています。ちなみにこの会はどなたでも参加できます（笑）

南学会

先代の住職と出会うことになかった私は特にそうかもしれないが、お坊さんをしていると、お坊さんならではの悩みとか「あ、あしたいけどできない」といったようなことが結構あるものです。門徒さんや家族にも相談できない、孤独な部分ですね。日本にはたくさん寺もあるし、お坊さんもいます。でも案外と寺同士の敷居が高くて横のつながりは少ないんです。それで今から12年前に私も立ち上げメンバーとなり湖南域

良覚寺の門前（矢橋）



（湖南市から大津）の若いお坊さん20人くらいで「南学会」をつくりました。共に学ぶ場、本音で語り合う場としての勉強会です。基本は学習、コミュニケーション、つながりです。共に学びをしていることは大事だと思えます。何かをしていくときにも、学びを一緒にしている者と、急に集められた者とは全然違う。まだみんな40代と若いので、これから何かをしていくとするとときに、このような関わりがあると違うと思っています。

「この南学会でも「寺として子どもたちと今このように関わっていくのか」というのが問題になっています。「（仏教 子ども会）」というのを強く言うお坊さんも多いし、私もそう思っています。学校だけでなく、

地域の中での子どもの学びが必要。宗教教育ほど大げさでなくて、子どもらが抱えている悩みをちよっと聞いてみるとか、お勤めを一緒にするとか、そういったことができればなと思っています

います。子どもの学びには行政だけではできない部分があるんです。

本当に寺を必要とする人に

「お寺は敷居の高さ」は寺同士だけの話ではありません。住職になる前の自分がそうだったように、ある意味の「敷居の高さ」を感じてる地域の人たちも少なくありません。

少なくとも今生きていて本当に苦しんでいる人と寺が関わっているかと言えば絶対にそんなことはない。寺側もそのような方が地域におられることを薄々知っていても、ずっと関わりを持たず、亡くなられたときの葬式が最初の関わりとなってしまう。とりわけ社会的に弱い立場に追いやられた方々のことが気になります。

隅みずみまで言わないとしても、本当に寺を必要とされている人に目を向ける寺の運営が大事でないか。「負け組」と言われ、生きることに疲れたり、図らずも色々な縁に立ち切れてしまった方々に声をかけられるようなことがあったらなと思います。人や人の生に関わるのが寺なんです。現状では、その人が生前抱えていた問題を抜きにして、亡くなったと聞いて初めて関わる。それでは遅い。この地域にも独居老人がいるが、寺に足を運ばれる方は少ない。「呼ばれないと行けない。何か用がないと行けない場所」そんな寺の敷居を低くしていく努力が必要だと思っています。

意識して「開けとく」

寺とは子ども時代の寺子屋から死のお葬式まで、「生きている」ところに関わる「ところ」。「仏教とは

（左から）寺総代の山本さん、草川さん、谷住職



人間がどう生きるか」を説く教えだから赤ちゃんから、死ぬ直前、そして死後も関わるべきところだと思いませんか。経済的な社会構造の変化もあるが、今のお寺は人の生から離れてしまっているのかもしれない。

敷居を低くする一つとして「意識して寺を開く」ことを心掛けています。月に1回だけでも開かれた場所として行う「覺の会」もそうだし、寺から離れた若い人にとっては、身近なインターネットを使って意識して利用します。HPを開き、仏事のことも含めた相談にもメールでのります。今、地元の矢橋や新浜で獲れた大根を使った「ダイコ炊き」のイベントも計画しています。試行錯誤の連続ですが、複雑で、ともすると生きることに背を向けたくなる今の社会だからこそ、生と関わる寺の役割は大きい。だからこそ意識して「開けとく」ことが今のお寺さんに必要なことなんじゃないかと思うのです。

○良覚寺

矢橋にある浄土真宗（大谷派）のお寺。
草津市矢橋町1137
電話/FAX 562-1115
<http://ryokakuji.net>

第13回 異国の王子が たどり着いた地 ～集から穴村へ～

ゆっくり草津 街道物語

集町を流れ琵琶湖へとつながる中ノ井川は、かつて人や荷物を乗せた舟が行き交い、たいそう賑わっていたそうです。多くの人や物資がここに集まってきたから、この地を「集」と呼ぶようになったとか。今日はこの集から穴村を歩きます。

双子のような川

伊勢落（栗東市）の中ノ井付近で野洲川の支流となる中ノ井川。駒井沢町で駒井川と分かれ、集を通り、そしてまた出会う双子のような川です。その後は葉山川と合流し川幅を広げながら琵琶湖へと注ぎこみます。

中ノ井川をたどりながら集を歩くと川がクランクになっている場所に着きました。鎌倉から戦国にかけては人が、以後、明治までは人だけでなくモノも舟で運ばれ、市場も開かれました。「この近くの字名が「市場」なのはそのためです。物資を輸送したこの川が、いかにこの辺りの暮らしに根ざしていたのかわかりません。川のせせらぎを目と耳で楽しみながら集の路地を歩きます。

戒定院に着きました。江戸後期、駒井沢の中井吉衛門の娘は、京都の公家である一条家の芳春院に仕えていました。芳春院から頼まれ阿弥陀如来と観音菩薩をまつり、芳春院を弔うために建立されたのが、ここ戒定院です。剃髪後は「真如」と名のつたことから真如庵ともいわれます。代々尼僧が住職を務め「市場の庵主さん」と呼ばれています。近くの仲井（中井）姓の軒がお堂のお世話をしています。

落城後はのどかな景色

駒井沢・新堂・集・十里・穴村・北大萱の一角を「駒井ノ庄」と言いました。中でも駒井沢・新堂・集を「駒井村」といい、駒井城を中心とした城下町でした。城といっても天守閣や石垣はなく、竹藪で囲んだ土塁を築き、周囲を空堀でめぐらせた館です。近くの田畑を「中ノ倉」と呼ぶことから城内に倉があったことが想像されます。「応永の乱」の後、佐々木六角の家臣だった駒井氏により建てられたが、1573年、瀬田城主の山岡景隆に攻められ落城しました。今は城を囲んだ竹藪もなく、田畑が広がる一面のどかな景色となっています。その城跡は美しく掃き清められ建分大明神が氏神様としてまつられています。

駒井沢から集方面に向かうと正三神社があります。集の氏神様で建立は676年、藤原鎌足の息子である定恵によるものです。火災・台風など幾度かの災害にあつたに再建されています。境内の観音堂には平安時代のものでされる木造の十一面観音菩薩が安置され草津市の文化財に指定されています。またこの地は宝光寺（北大萱）の4つの別院のひとつ智嚴寺の跡地とされ、境内の隅には当時のものと思われる台石や宝塔の丸い石などが今も残ります。こちらの祭神は立木神社と同じ戦の神がまつられています。

正三神社の隣は阿弥陀寺です。元々、さきほどの宝光寺の七精舎の一つとして北大萱にあつたものが江戸時代に移されました。再三火災にあつたことから明治元年

ちよんまげした墓



ちよんまげの形は武士の墓石の特徴

に手原（栗東市）の陣屋を移築し本堂としましたが、現在の姿は平成7年に新築されたも

これが安羅神社の鳥居。額束を畳一畳分。



穴村の安羅神社では堂々とした風格のある石の鳥居が迎えてくれます。この鳥居、明治時代に満州国の総務次官であった駒井徳三氏が寄贈したもので、鳥居にかけられた『安羅神社』の額束は畳一畳分もある大きなものです。

穴村の安羅神社では堂々とした風格のある石の鳥居が迎えてくれます。この鳥居、明治時代に満州国の総務次官であった駒井徳三氏が寄贈したもので、鳥居にかけられた『安羅神社』の額束は畳一畳分もある大きなものです。

異国の王子がやってきた

路地をしばらく歩くと「右 あみだ寺へ 一丁 左 穴村へ」と刻まれた小さな道標があります。一丁は約110m、道標に導かれながら穴村、安羅神社へと向かいます。

阿弥陀寺のすぐ近くには駒井家の菩提寺である永秀院があります。小谷城の戦いで討ち死にした駒井永秀を弔うため、息子の秀国が開いたといわれています。境内に歴代の駒井氏当主と住職の墓があります。ちよんまげのような形の石塔は江戸時代の武士の墓石の特徴で、もちろん駒井氏の歴代当主のもの。卵形の石塔は「無縫塔」といわれ住職のもので、元檀家や近所の方々が無住の境内を、美しく大切に守られていることがうかがわれます。

のんびりワンちゃんと出会った



にやって来ました。

天日槍はその過程で医術・製鉄・製陶の技術を日本に伝えていきました。ここ穴村では医術が、竜王町の鏡では製陶技術が、そして天日槍はその後、若狭に行き出石に留まりました。鏡神社や出石神社の祭神が安羅神社と同じ天日槍なのはこのためです。遠く離れた3つの神社が天日槍という糸でつながります。

また安羅神社には焼いた石を布にくるみ、温めて患部を治療する「温石」と呼ばれる黒い石が、社宝として大切に残されています。本殿の両扉の内側には桃山時代の作といわれる右大臣・左大臣が描かれています。どちらも普段は見ることができません。また鎌倉時代に建てたとされる境内の五輪塔は歴史の重さを物語ってくれています。

神社前の道と瀬田から続く芦浦道との辻にある道標には「右 や者せ 左 くさつ／＼者ら」と刻まれています。

安羅神社にまつ

られているのは新羅の王子、天日槍です。「どうして穴村に新羅の王子が？」との声が聞こえてきそうです。日本書紀によると新羅の王子、天日槍が渡来し、瀬戸内海から播磨、浪速の港から宇治川をさかのぼり、ここ近江の国

います。

この芦浦道は瀬田から矢橋を通り、葉山川にかかる観音寺橋を渡って芦浦観音寺へと続く道です。

「穴村のもんもん」と「串だん」

どこか懐かしい風情を残す穴村をくるとめぐる、川沿いにレンガ作りの大きな建物。穴村診療所です。「穴村のもんもん」と言っていたほうがピンとくる人も多いかもしれません。「この「穴村のもんもん」と呼ばれる墨灸は夜泣きや癩の虫に効くことで有名でした。前庭にある大きな松の木の下では、診察の順番を待つたくさんの親子連れで賑わっていたそうです。

穴村にはかつて港があり、大津と志那、赤野井(守山)を結ぶ蒸気船は穴村港へも立ち寄り、明治から昭和初期にかけて多くの利用客がありました。もちろん目的は「穴村のもんもん」。穴村港から「もんもん」まで約2kmの道のりは、遠く大阪や京都、大津から診療を受けにきた親子連れ



穴村診療所。門の向こうに大きな松の木が。

れで溢れ、人だけでなく馬車・人力車・貸し乳母車で列をなしていました。

これらの人を受け入れるかのように穴村診療所前の道路は下駄屋・まんじゅうや・郵便局などいくつものお店が並び

多くの賑わいを見せました。今も残る吉田玉栄堂で作る「穴村名物串だんご」が往時をしのばせる手掛かりです。もんやでの待ち時間のおやつやお土産にと、末広の形をした10本に裂いた串に乳首に似せた小さなだんごを刺し、醤油を絡めた素朴な味の「穴村串だんご」はとても人気でした。今でも月々水曜日のみ予約販売をされています。

安羅神社の温石に穴村のもんもん。穴村で触れた二つの医術、これも遠く新羅から来た王子、天日槍がこの地に伝え残したもののなのでしょう。安羅神社が天日槍をまつている由緒から今でも穴村と韓国の交流があるそうです。

元々、草津の「津」は人や物が集配されるターミナルのような役割をする所からこの地名がついたとも言います。そこにたどり着いた異国の王子の心中はどんなものだったのか、どこかそんな情緒にさせる街道歩きでした。



(写真) 大條紘史 (イラスト) 大村恵

前号同コーナー「追分の道」内の行者堂のくだり (P.11) で「最近では…大峰山まで登ることはないようですが」と表記しました。発行後、追分の読者の方からご連絡をいただきました。現在も年に1回 (6月) に大峰山にお参りに行かれています。お詫びするとともに訂正いたします。ご連絡ありがとうございます。

お寺という「場」を共に創っていく

應典院 主幹 山口洋典さん



良覚寺と西方寺。これまでお寺と地域の関わりについてお聞きしました。どちらのお話からも見えてくるキーワードの一つに「開く」ということがあるようです。

今の社会は本当に複雑だし、これまで普通だと思われていた色々なつながりや「縁」も途切れがち。「無縁社会」とも言われるこんな時代だからこそ、お寺さんへの期待は高まりながらも、そのお寺さんとの「縁」ですら薄れつつあるのも気がかりなところ。このギャップを埋めるべく、寺を地域に開く努力も知ることができました。

お寺さんがどのように地域に「開く」「開かれる」のか。ここではユニークな形で「開く」ことにチャレンジされている大阪・天王寺にある浄土宗のお寺「應典院」について、主幹の山口洋典さんにお話を聞きました。

「開かれたお寺」であり続けるために… 應典院 (大阪) のチャレンジ

お葬式をしない寺

大阪城の城砦都市として25もの浄土宗のお寺が建ち並ぶ天王寺区下寺町に應典院があります。隣にある本寺「大蓮寺」三世の隠棲所として1614年に創建されていますが、戦争の空襲で本寺とあわせて焼失しました。まずは完全焼失した大蓮寺が復興され、その後、大蓮寺創建450年記念事業として應典院を再建。1997年に鉄とガラスとコンクリートのモダンな寺院が誕生しました。ちょうど阪神・淡路大震災やオウム真理教事件の記憶も新しく、世の中が大きく変わろうとしていたころです。再建にあたっては「都市の文化装置」として地域に開き、一人ひとりが『生きる』意味を常に問い

應典院 主幹 山口洋典さん



應典院

続けられる場所を目指すという理念を掲げて、應典院は動き始めたのです。

の特徴は3つあります。まずは檀家制度をもとにした会員制のNPOが運営していること、よって「お葬式はしない」と再建時に決めたこと、そして場所を開くために本堂が劇場仕様となっていることです。このような斬新な挑戦ができたのも約400軒の檀家を持つ大蓮寺が隣りにあること。應典院は言わば大蓮寺の社会貢献部門のように位置づけられ、寺子屋などの学びの側面、駆け込み寺といった癒しの側面など、かつてお寺が地域で果たしてきた役割を温故知新で担っている活動しているのです。

本堂は劇場

単にお寺の「温故知新」といっても、時代が取り巻く環境も大きく変わっています。先のオウム真理教事件の際、ある信者はお寺を「風景の一部だった。心理的に遠い存在だった」と語りました。「いざ」という時の駆け込みでなく、普段から訪ねることのできる身近な寺。それにはまず現代の形にあった気軽に来られる空間としての開き方、それも多様な開き方が必要です。應典院は当時の大蓮寺副住職

が映画界で活躍した人物だったこともあり、「開く」にあたっては特に文化活動に力点が置かれました。2階にある劇場仕様の本堂では演劇やコンサート、映画の上映、その他講演会やシンポジウムなど多彩な催しが繰り広げられています。また1階の研修室では定例の講座が開催され、墓地が見えるロビーは時に展示空間になります。玄関ホールはチャリティー本が置かれ、情報や人々の交流の場となっています。

寺が持つ意味と価値を貫く

お寺を「開く」上で大切なのは単に場所を提供するだけでなく、共に場を創造することです。貸す側も借りる側も「お寺」でその催しがなされる意義を考え、そこに価値を込めていく、そうしたある種の緊張関係が重要です。應典院では「気づき、学び、遊び」の3つを鍵として、単に地元という意味ではなく広域的な地域とのネットワークづくりに取り組んでいます。例えば以前「コスパールのコンサートをしたい」という方が来られました。「異なる宗教の音楽だからダメ」ということはありません。むしろ大切な誰かを思い浮かべながら歌い、聞くのに、お寺って非常に尊い場だと思いませんか？「楽しかった」と感じてもらうだけでもいいかもしれませんが、それでは「別にお寺でなくてもよかったのでは」ということになってしまふ。生と死に向き合う宗教空間が持つ意味や価値を愚直に追求するということが、いつもその軸が貫かれるように心がけています。

開き方は多様であっていい

應典院には市民が参加できる事業を企画運営することで「場」を支える應典院寺町倶楽部があります。これも開かれたお寺であり続けるために欠かせない要素となっています。つまりNPOが場を開き続けるサポーターでもあるんです。お寺とNPOの協働という新しい形で積み重ねるこれらの活動は、檀家制度に頼らないお寺の多様な開き方の一つだと思っています。

言うまでもなく寺院は宗教法人です。今、税制優遇への議論が高まっています。改めてその公益性が問われているのだと思います。お寺を「まちに開く」とことは「できるかできないか」ではなく「するかしないか」の問題。その際に、場を開く側と担う側の関係づくりが欠かせません。またそうした催しを通じて場に集う人がいてこそ、宗教空間がいのちの文化を織りなす場となります。無縁社会と言われる現代に「自分ばかりがえのない誰かのおかげで生かされていること」それを実感できる場づくりに今後も取り組んでいきます。



應典院寺町倶楽部が主催する「いのちと出会う会」の開催は100回を越える。

俳句散歩 冬

今年は、近年になく寒い冬となりました。草津でも何度か雪が降り、日本海側の雪国では、道路や列車が不通になりました。そうした、寒い中でこそ咲く花を詠んだ無村の俳句を楽しんでみましょう。（解説 橋詰辰夫）



やはり、この水仙はラッパ水仙や黄水仙ではなく、白い花びらに黄色い花冠を付けた原種でなくてはいけません。また、狐が狸に変わっては絵になりませんね。皆さんも、この後の物語を作ってお子さんやお孫さんに聞かせてみて下さい。

水仙は、原産地が地中海でシルクロードを経て中国に伝来し、日本にやって来たそうです。中国では水辺に咲く花を「仙人」にたとえ、気品のある花とされます。日本では、厳寒期に清楚で高貴で、また良い香りのある花を咲かせます。野生では越前海岸の水仙が有名ですが、植栽されたものは身近に見ることができません。

さて、無村は水仙が咲き、宵口の冬の月が寒々と照る野原で狐を遊ばせています。もちろんメルヘンの世界ですが、狐、月、水仙と三つの画材を並べて、俳句で一幅の水彩画を描いています。改めて無村が画家であることを思い知らされます。「ここで狐が何のために、何をしているのか、その後の物語は、すべて読者に任せています。」



水仙に 狐遊ぶや 宵月夜

与謝蕪村

茶の花や 黄にも白にも おぼつかない

与謝蕪村

茶の木も中国から、1191年に僧栄西が薬として持ち帰ったそうです。茶の木はツバキの仲間です。サザンカと近縁で、剪定せずに放置すると6〜7mの高さになります。茶の花は初冬から咲き始めて正月過ぎまで咲き続けます。俳句では冬の季語とされています。

無村が生きた時代から昭和初期までは、農家の畑の縁に茶の木を植え自家用のお茶を作っていました。ですから、今でも里山の周辺や人が住まなくなつた屋敷跡や、耕作を放棄された畑の縁によく見かけます。

その花ですが、本誌の2005年冬号で「何の花かな？」で紹介したように、2.5cm位のずんぐりした白い花が下を向いて咲きます。白い5弁の花びらの中に黄色い雄しべがたくさんあり、中心に雌しべが一本あります。花びらの周辺は白くてくっきりしていますが、中心に向かうと、黄色い雄しべが刷毛か、可愛いポンポンの様に並びます。その上、花粉が花びらにつくと元々白い花びらが白から黄色へのグラデーションを描きます。まるで子供がいたずらで頬紅を塗ったように、ぼんやりしてきます。

これを見て、無村は茶の花は白だろうか、黄だろうかはつきしないなあ、と嘆いています。無村は見かけによらずユーモアと繊細な感覚を持つ俳人でもまた画家です。

この時期には花の盛りを過ぎています。散歩道やハイキング途中で「おぼつかない」花を見つけて無村の嘆きを味わって下さい。その日に飲むお茶は、きつとおぼつかない、美味な味がすることでしょう。



絵 矢原功



第2回 元気なまち 一人のやる気で地域が変わる ～みどり会とD氏の場合～

三寒四温。庭のフクジュソウがひしめき合って、暖かい日を見つけては伸びてきているのが分かる。「ダ〜ルマさんが転んだ」とでも言ってるのだろうか。今回は、まさに「一人のやる気で地域が変わる」好例としてグリーンハイツ北町（笠縫東学区）の道路愛護団体「みどり会」とD氏をご紹介させていただきます。

高架下のうす暗い街に

D氏によれば、道路問題に関わったのが平成2年（1990年）以来というから、実に20年の歳月が過ぎたことになる。これほどまでに道路問題に力を注いだのは、高圧的な行政職員に対する「負けてたまるか」の根性と当時の町会長の不屈の魂を垣間見たからだそうだ。

約200戸の新興住宅街として誕生してから30周年。今、近江大橋から一直線の大津湖南幹線（県道大津守山線）と下笠下砥山線（下々線）が交わる、あの歩車分離式信号「川原小久保」の交差点により私たちのまちは4つに分断されているが、緑豊かな実に美しい通りになっている。かつては立体交差の計画で、高架の下のうす暗い街になるところであった。

気恥ずかしくてモヤモヤ

「自分たちのまちは自分たちがつくる」という気概が人を動かし、人を集める。道路に関する環境問題に関しては、早くから町内道路委員会を組織し、今も県、市と環境保全や安全面を中心に定期的に話し合いの場を持っている。

道路愛護団体「みどり会」が誕生したのは、そのような道路をこよなく愛する気持の結晶かも知れない。幾多の道路問題を克服しながら生まれてきた背景がある。

D氏の話が面白い。定年後、時間もできたので、「道路まわりを少しでもきれいにしよう」と、草抜きやごみ拾いをやろうとしたが、気恥ずかしくて何となくモヤモヤしていた。

平成15年3月のことだった。県が「美知普請」でボランティアを募集しているのを新聞で知った。締め切りが迫っているが、申請条件が10名以上とあ



る。町内の道路委員会で提案するも賛同を得られず、町内会総会で会員を募集。会長経験者に名前を借りて22名で申請し、スタートをきった。「実に嬉しかった」と回顧する。

理屈でなく…

継続を第一とし、そのため会則も作らず会費もない。年に一度でも参加してもらえればよい。「できる人が、できる時に、できる事をする」をモットーにしている。継続のコツかも知れない。

今では50名ものボランティアがいて、毎月1回、町内を走る道路脇の植栽帯の手入れと清掃を続けている。具体的には、中低木の剪定、除草、道路周辺のごみ拾いと清掃、それに夏場にはアジサイの水やりまでも有志でやっている。

D氏の信念と行動力のおかげで良い環境下で生活でき、これをきっかけに各種ボランティア団体が生まれ地域の輪が広がった意味はとても大きな成果だと、いつも感謝しています。

高齢化が進む中、こうした機会に皆が集まれば話もはずみ、遊びの話も生まれてくる。協力しあえる環境づくりとは理屈ではなく、日頃のこんなことが何より大切に思う今日この頃です。

熊谷栄三郎の
徒然草津
つれづれくさつ

第3回

犬が好き

熊谷栄三郎



犬が好きである。街角からのテレビの現場中継で、偶然ちよこつと犬が映ってから、すぐ人間だけの映像に切り替わることがある。そんなとき「人なんか写さんでもええ、ワンちゃんを写せワンちゃんを」と怒鳴ってしまうくらい好きである。

犬のいる家が減ったように思う。毎日の散歩コースを、できるだけ犬がいる庭の前を通るように設定してきた私の感想だ。その庭の主人公たちが老いて姿を消し始めた。今では、散歩コースで待っていてくれる犬は以前の半数もないような気がする。室内犬が増えて、外から見えなくなっただけだろうか。

本当の理由は、愛犬家自身が高齢化したからかも、と私は勘繰っている。もっいちど飼いたくても、高齢者は犬と自分の寿命を考え合わせて、躊躇するのではないかと。十年前に悪犬ゲンキを亡くした私がそうだ。ますます老いてゆく年齢では、愛犬を亡くしたときの悲しみに耐えることができずもないぞ、などと弱気になってしまっただ。

くさつ情報ネット が新しく！

HP

HP「932情報ネット」が「くさつ情報ネット」と名前も新たに全面リニューアルしました。

見やすく親しみやすい構成はもちろん、本誌のバックナンバーや「ゆっくり草津 街道物語」など人気コーナーを縦軸で再構成しご覧いただけるようになりました。まずは下のアドレスをクリック！

くさつ情報ネット <http://www.joho932.net>

編集後記

▼今こそ助け合いの精神、日本人の不屈の魂が発揮され、整然と対応する時です。自分ができるところを考えましょう。（大條）▼春の訪れを待ち望んで早春号の原稿を書きましたが、巨大地震で心の春は遠くなりました。（橋詰）▼上笠天満宮の梅は今年もきれいな花を見せてくれました。寒い冬でしたが、春はやってきたのです。辛いニュースの日々ですが、元気を取り戻しましょう（中井）▼花のたよりが聞かれる季節になりました。みちのくにも一日も早く春がくるように祈念しています。（矢原）▼どんなささやかなことでも、やろうとする気持ちが大切。それがボランティアの始まりだと思うのです。（大村）▼震災で原子力の影響がこんなに近くに感じるようになり、怖さとともに「家があって食事ができる日常が幸せだったと気づいた」と話す小学生の言葉に胸が痛みます。（荒川）▼全国の寺院は77000。コンビニの2倍だそうです。避難所として被災者のお世話をするお寺や立って義援金を募るお坊さんの姿をテレビで観ました。孤独にさせない。必ずや春がきます。頑張りましょう。（茶木）

このたびの東北地方太平洋沖地震で被災された皆様には、心よりお見舞い申し上げます。

また、お亡くなりになられた方々には、ご冥福を心からお祈り申し上げます。

草津市コミュニティ事業団では草津市や草津市社会福祉協議会と連携し「市立まちづくりセンター」をはじめ、指定管理を受ける公共施設や独自施設において災害義援金を募っています。皆さまのご協力をお願いします。（日本赤十字社を通じて被災地の復興に役立てられます）

市民編集ボランティア募集！

コミュニティくさつ編集部
（財）草津市コミュニティ事業団内
〒525-0037
滋賀県草津市西大路町9-6（まちづくりセンター内）
電話 (077) 565-0477
ファックス (077) 562-9340
メール com-com@mx.biwa.ne.jp
URL <http://www.kusatsu.or.jp/>



再生紙使用

～地球にやさしいまちづくり～